
IBS - インフィニット・バサロス

織斑蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IBS・インフィニット・バサラトス

【Nコード】

N0609X

【作者名】

織斑蒼

【あらすじ】

戦国BASARAの世界の政宗と幸村を初めとする武将達が死後、ISの世界に転生してきた！前世の記憶を持っている政宗は自分と違って前世の記憶を持たない幸村とともにISを起動させてしまったことでIS学園に強制入学することに！そして女尊男卑の世界を変えようと暗躍する謎の影が見え隠れする中、彼らは個性豊かな仲間達とともにハチャメチャな学園生活を送ることに！

竜の生まれ変わり その名は伊達政宗（前書き）

注意

- ・この小説は作者の妄想を詰め込んだものです。
- ・BASARAキャラは前世の記憶がある人となない人がいます。
- ・政宗が女嫌いです。
- ・恋愛がほとんどありません。ほとんど男の友情ばっかです。
- ・この小説は作者が戦闘描写勉強のために書いています。

以上のことを踏まえて呼んでください。

竜の生まれ変わり その名は伊達政宗

・SIDEファースト主人公・

IS…正式名称インフィニット・ストラトス。

篠ノ乃束という人物が開発したパワードスーツだ。

しかし、このスーツは女にしか動かせず世界は女尊男卑になった…

俺はこの世界に疑問を抱いている。

女尊男卑なんて完全な差別だ。俺はクラスメイトの男子が女子が掃除をサボることで喧嘩して負けた光景を見たことがある。

そのとき女子が男子に何て言ったと思う？

『女子の方が偉いんだから掃除くらい男子がやりなさいよ！』

なぜ？

HA！どれだけ甘やかされて育ったか知らねえがそんな言い分が通るわけねえだろう！

けど…その言い分は通ってしまった。

担任の先生までもが女尊男卑をしていたのだ。

俺はこの事件から優しい母上以外の全ての女が大嫌いになった。

世界を変えてやりたい…

俺はいつしか疑問が夢に変わっていた。

男女平等、誰も差別されない世界を作りたい。

俺がそんな夢を抱き始めて少しも経たないうちに俺のクラスに転校生が来た。

そいつは俺が前世で好敵手と認めた紅く燃える炎を連想させるあい
つ…

「真田幸村と申す！喋り方がおかしいとよく言われますがそこには突っ込まないで置いてほしい。これからよろしくお頼み申す！」

あれから7年…

俺と幸村は再会したが幸村は俺のことを覚えていなかった。
いいや…前世のことを全て覚えていなかった。

けど、俺達は大親友と呼べる関係になった。
高校も同じ高校、藍越学園を受験した。

……はずだった。

「さ…ね！ま…む…！政宗！！」

幸村の声にガバツと顔を上げる。

shit！つつい、物思いに浸っていたらつい…

今は自己紹介の時間だったな。

ここはIS学園、IS操縦者を育てる国立の学校だ。

何故俺達が女性しか動かせないISの操縦者を育てる学校にいるか
というと…

俺達は藍越学園の受験会場に行くはずが何故だかIS学園の試験会場に入りISを起動させてしまい国からの命令でこのIS学園に強制入学させられてしまったのだ。

あの学校の名前がややこしかったのが憎い…

大嫌いな女がいる学校に強制入学してしまった自分の不幸を恨みた
い…！

「政宗の番でござるよ?。」

「あ、ああ…俺の名前は伊達政宗^{だて まさむね}。皆も既に知ってるかと思うが世界で少数のISを男で起動できる人間だ。ISは素人だから接するときはそこそこを踏まえて接してほしい。あと失礼かと思うが俺は親以外の女が大嫌いだね。できれば必要最低限話しかけないでほしい。」

俺はそれだけ言つと席に着く。

先公がオロオロしていたが無視。

俺は再び窓の外を見て物思いにふけり始めた。

まずはこの学園でど派手なPartyでも起こすとするか…!

竜の生まれ変わり その名は伊達政宗（後書き）

次回は一夏と知り合いセシリアと接触します。

セシリア・オルコットと石田三成（前書き）

な、何故だかノリで始めたこの小説が現在の時点で6件お気に入り登録されています…

驚きましたね。

ぶっちゃけ皆さんの期待に答えれるかわかりません…

セシリア・オルコットと石田三成

・SIDE政宗・

登校初日から授業が始まった。

他の生徒たちは何を今更のような感じで聞いている。

俺と幸村はマニュアルとか言うのを読んでおいたから問題はないが…

たしか俺たちの他に2人ほど男のIS操縦者がいたはず…

そいつは1人だけ別のクラスにいるから知らねえが残りの一夏とか言うやつは…

「電話帳と間違えて捨てました。」

ダメだありゃ…

現に担任の織斑って女に頭引っ叩かれてるしな…

「伊達に真田、お前達はどうなんだ？」

織斑女教師が話しかけてくる。

「政宗に手伝ってもらい何とか覚えることができましたゆえ！」

「あんなもん『アレ』に比べればEasy victory。楽勝だぜ。」

俺は遠い目をして前世で自分の右目に監視されながら嫌々やっていたあの書類の山を思い出す。

ああ、あれは大変だった。逃げ出したら小十郎に正座させられて説教だからな…

あれはもうマジで泣きたくなった。筆頭として泣かなかったけど…

授業が終わり、俺と幸村の側に織斑一夏とか言っやつが来た。

「ええっと、伊達に真田だよな？」

「政宗でいいぜ。」

「俺のことも幸村でいいぞ。」

俺と幸村はそう返した。

「じゃあ政宗に幸村、俺は織斑一夏。これからよろしくな。」

「ああ。」

「うむ！」

俺たちが返事をする和一夏は緊張が解けたように笑った。

「よかった〜！いきなり女だらけの学校に男が1人ポーンと投げ入れられた感じだからメンタル的にキツかったんだよな。でも同じ男がいてくれて助かったよ…」

「俺も同じ男がいてくれて助かった。これからよろしく頼む。」

「ああ！」

一夏と幸村が手をガッチリと握っている。
俺は一夏に疑問を投げかけてみた。

「Hey一夏。とつぜんだが聞きたいことがある。」

「何だ？」

「お前は、この世界をどう思っている？」

「へ？」

あつけにとられた顔を一夏はした。
そりゃそうだ。いきなり世界がどうとか質問を投げかけられれば普通はこうなる。

「この女尊男卑の世界のことだ。お前は見たことないか？街中で男をパシリに使う女。」

「そーいえば…」

「俺の通っていた小学校にもそんなやつらが大勢いた。」

幸村が手を上げ言う。

「俺もある女子おなこに告白というものをされてな。断つたのだがいきなりその女子が『何よ何よ！女は偉いんだから男は黙って言うこと聞いてればいいのに！』と喚きだす始末で…。」

「それは自分勝手だな。」

いきなり女の声がした。
誰だこいつ？

「誰だてめえ？」

「すまなかったな。とつぜん話に割り込んで。私は篠ノ乃箒だ。夏
の幼馴染でもある。」

「夏の幼馴染か…。
しかしこの女、間違いないな。
こいつは…」

『強い！』

俺の中で何かがうずき始めた。
こいつは前世で幸村と出会い戦ったときの感覚と同じだ…

しかしこいつも女。
俺の嫌いな人間に変わりはない。

「何の用だChildhood friend girl?」

「へ？今なんて…」

「一夏が？を浮かべている。」

shit！こいつは難しすぎる単語だったか？

「幼馴染女という意味か？」

「yes！」

俺は篠ノ乃の言葉にそう答える。

「政宗は日本語に英語を織り交ぜて使う話し方をするのでござる。」

「へえ…変わってるな。」

「HA！やっぱりお前からしたら変だよな？よく言われるぜ。」

「いや、伊達らしさが出てていいと思うぞ。」

篠ノ乃がそう言った。

そりゃどうも。もっとも、女のお前に言われても嬉かないけどな。
いや、ちよっとは嬉しいのか？わかんねえ…

「とりあえずありがとうとは言っとくぜ。」

「すまぬ。政宗は先ほどの紹介どおり女子が嫌いなのだ。」

「コホン。話がそれたな。女尊男卑のこの世界、お前らはどう思う？」

俺が話を戻すと一夏と篠ノ乃は考え込んだ。

「どうって言われてもなあ…考えたこともなかったし…」

「私は…差別はいけないと思うが、しかし」

「それを認めたら自分も悪いと認めなければならない、か？」

「な!？」

凶星。結局、皆自分の保身ばかりか。

「わ、私はそんなこと」

「思っていない？動揺しているのが見え見えだぜ篠ノ乃。」

「ま、政宗！篠ノ乃はそんなことを考えるような人間では」

幸村の言葉をバツサリ切り捨てた。

「人間、誰にでもあるんだぜ。恐怖心つてのは。」

俺は前世と同じ眼帯をしている右目に触れた。

『化け物!!』

違う、俺は化け物じゃ「ちよつと、よろしくて？」

そんな俺の思考を遮るように何者かが声をかけてきた。

「「「あ？」「」」

篠ノ乃を入れた全員の声がシンクロした。

俺達の反応に大げさに話しかけてきた女は反応した。

「まあ！？何ですのその態度！？この私に話しかけられるだけでも
光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるんじゃないかって
？」

俺はあからさまに嫌な顔をした。

こいつは女尊男卑をそのまま現した様なやつだったから。

「それ相応の態度？とんだナルシストだな。」

とつぜん扉のほうから聞こえてきた声に俺達は振り向く。
そこにはかつて前世で俺に憎しみを抱いていた男…

「み、三成！？」

いしだみつなり
石田三成がいた。

この世界では俺とあいつの関係は所謂、幼馴染という関係で腐れ縁というやつだ。

ちなみに三成は前世の記憶を持っている。

俺への憎しみはぶっちゃけ、時の流れで考え方が変わったことにより無くなっていったようだ。

時の流れ、恐るべしだぜ。

家康にも謝りたいと思い（本人は否定しているが）探しているが未だに見つからない。

見つかったも俺達のことを覚えてるかどうかが怪しいがな…

「ああ、彼方が4人目の男性でISを扱える方ですわね？それにしても、先ほどのはどういうことでしょうか！？」

気づくと三成は俺達の側に来ていて俺達に話しかけてきた女は三成に突っかかっていた。

「言ったとおりだ。お前は自分で自分を称えているナルシストだとそんなやつにそれ相応の態度をとれというのがまず無理な話だ。」

「な、何ですのその態度！？」

「そもそも俺達、君のこと知らないし…」

一夏がオドオドと手を上げ言った。

「知らない！？このセシリア・オルコットを！？イギリスの代表候補のこの私を」

「ちょっと質問いいか？」

一夏がまたもや手を上げた。

「フツ、下々の頼みを聞くのも貴族の務め。よろしくてよ。」

こいつ貴族だったのか。

どおりで偉そうだと思っただぜ。俺は『元』奥州筆頭だけだな…

一夏は真面目な顔をして聞いた。

「…代表候補って、何？」

ドドドドッ

周りで聞き耳を立てていた女達、俺、篠ノ乃がズッコけた。
三成は顔に手を当ててハアと溜息をついている。

「ありえませんか！日本の男性というのはこれほど知識の乏しいものなのかしら！？」

「日本の男全員を巻き込まないでくれ。」

俺が静かにそう言った。

というか一夏、代表候補知らないのか？

「国家のIS操縦者の候補として選ばれた者のことだ。」

三成の説明に一夏と幸村は納得したように頷く。
ん？幸村？お前まで知らなかったのか？

「とにかく私はエリートなのです！本来、私のような選ばれた人間と同じクラスなだけでも奇跡！幸運なのですよ。その現実をもう少し理解してくださる？」

「己で己を高評価しているやつほど弱い者はいない。」

三成、その辺にしておけ。

自称エリートgieriが体を震わせてご立腹だぜ？

「ま、まあ、私は優しい人間ですから彼方方のような人間にも優しくしてあげますわ。わからないことがあれば、泣いて頼まれたら教えて差し上げることもなくってよ？」

「ほう、これが優しさなのか。世の中にはこんな優しさもあるのかな？」

三成がさらに挑発するような言い方をする。

「（ビキッ！）な、何せ私、入試で教官を倒したエリート中のエリートですから！」

「入試など、普通より低いレベルで設定されているのが一般的だ。それに、私と幸村、政宗も倒したぞ？」

三成の言葉に自称エリートgierriの顔が驚きでいっぱいになる。

「あ、俺も倒したぞ？」

「な！？」

一夏の言葉にさらに驚きが生まれたようだ。

「わ、私だけと聞いていましたが？」

「女子の中でというオチでは？」

幸村の言葉にあつという間に顔を厳しくする自称エリートgierri。
そんなとき予鈴が鳴った。

「また後で来ますわ！覚えておきなさい！」

自称エリートgierriはそのまま去っていく。

最後の、定番の悪人の捨て台詞みたいだったぞ？

「私も教室に戻ろうか。政宗、幸村。また後で。」

「ああ。」

「あ！待て、お前名前は！？」

篠ノ乃が三成を止める。

「…石田三成だ。あとは政宗達にでも聞け。」

三成はそのまま自分の教室へと帰っていった。

「…珍しいこともあるもんだぜ。」

あの三成が名前を名乗るなんてな…

・SIDE NO・

「速く『コレ』をあの人達に届けなくちゃならないのに…！」

フードを被った青年はIS学園へと走って向かっていた。

時には屋根の上をその軽い身のこなしで走り抜け人間としての身体能力を軽々超えた動きで移動していた。

「クソッ！中々追っ手が撒かれてくれないね…！」

青年の後ろには、ISが3体全力で追いかけてきていた。

「仕方ない。ここで本領発揮といきますかね…！」

青年はそう言う腕につけていた手裏剣形の飾りのついたブレスレットを前に突き出した。

「IBS、??蒼天。戦闘状態バトルモードON!」

青年がそう叫ぶと体が光に包まれ青年は見たことのないISを身にまとっていた。

そのISは装備が極端に少なく迷彩の服に肘、膝、胴体、腰に同じように迷彩柄の装甲と背に鉄の羽、腰の装甲両方に巨大な手裏剣が1つずつ装着されているだけという物だった。

「さあて、邪魔しないでくれるかな…!?!」

青年は腰の巨大な手裏剣を1つ手に持つとISに攻撃を仕掛けた。

セシリア・オルコットと石田三成（後書き）

あ、あれ？三成ってこれでよかったのかな？

何かセシリアと陰険な分陰気だけど2人の性格からして馬が合う感じがしなかった…。

そしてISと違う新機体が登場です。

感想ほしいですね…まあ、始めたばかりですけど。

ぶっちゃけ、最後のってわかる人には誰だかわかりそうですけど…

期待を裏切ってしまったらごめんなさい。

それでは次回はセシリアの決闘宣言と部屋割りの話です。

部屋割りは原作から少し外れた話になるかもです。

巻き込まれたクラス代表決め 俺達のIS

・SIDE 幸村・

「さて、唐突になるが授業を始める前に決めなければならないことが一つある。再来週に行われるクラス対抗戦の代表者の決定だ。」

千冬教師から告げられた言葉にクラスがざわめきだす。

「わかんと思うがクラス代表者とはそのままの意味。対抗戦だけではなく生徒会の開く会議や委員会への出席、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが競争は向上心を生むからな。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで決めてくれ。」

ムムツ！これは中々に面白そうでござる！

しかし…そうなると政宗と鍛錬をする時間が減るな…

「はい！私は織斑君を推薦します！」

「ええ！？」

クラスメイトの1人がそう言い一夏が声を上げる。

「私も織斑君がいいと思います！」

その声を初めとし次々に一夏が代表が良いという声が聞こえてきた。しかし、そのように簡単に決めていいのか？代表だぞ？

俺は首を傾げ疑問を晴らすうと考える。

「男だからだな。」

政宗のポツリとつぶやいた言葉でああ、と俺は声を漏らし納得する。確かに世界で少数のISを使う男をクラス代表にすればそれなりにこのクラスは目立つだろう。

しかし、中には好奇心で一夏を選んでいる気がするでござる。いや、どちらも同じであろうな。

一夏が男だから。

とりあえず同じ男の俺や政宗が代表に選ばれなかっただけよかったと思っておこう。

「納得がいきませんわ!!」

とつぜんオルコットが声を荒げた。

「男がクラス代表？ありえません！実力の無い男がクラス代表だなんて恥さらしもいい所ですわ！このセシリア・オルコットにそんな屈辱を一年間味わえと仰るのですか!？」

そのまま俺達の国の悪口まで言い始めた。

「だいたい！文化的に後進的な国に暮らさなければならぬこと自体、私にとってはとても耐え難い事実で」

ドゴォ!!!!

全員がビクリと体を振るわせる。

…… やつてしまったか。

俺は隣を見た。

音の発信源は政宗だった。

壁際の政宗はその壁を殴っていたのだ。

むちゃくちゃ良い笑顔で。

壁は見事に穴が開いていた。

「……よくも言ってくれたな？不味い飯で何年も王者のイギリスの代表さんよ……」

「な！？おいしい料理はたくさんありますわ！彼方、私の祖国を侮辱するというの！？」

「その言葉そっくりそのまま返させてもらうぜ。今、アンタは俺達の国を侮辱した。」

政宗は物凄い目つきでオルコットを睨みつけた。

俺や三成以外、この視線を向けられるとまるで石のように硬直し生きた心地がしないと言う。

無論、それはこのIS学園の生徒達も例外ではないようで……

「さあ、お前は俺達の国を侮辱した。なら俺達の誰にでも言い返す

権利くらいあるだろう？どうなんだ、セシリア・オルコット……！！

政宗の怒声が響き渡りあの千冬教師までもが立ち竦んでいた。

とうぜんだろうな。その声にはかなりの殺気と重みが込められていたのだから。

まるで、この国をととても大切に思う王のようで……

っ！？

何だ今の痛みは！？

俺はとつぜん頭に走った痛み顔に顔を少し歪ませ手を頭に添えた。

瞬きをするため目を閉じた瞬間脳裏にフラッシュバックである映像が走り去った。

『奥州の独眼竜とお見受けいたす……！！』

『真田幸村、覚えとくぜ……』

い、今のは政宗と俺？

しかし何故政宗は馬に乗っていたんだ？

何故、俺達は鎧を纏っていたんだ？

わからない。それがもどかしい。

いつの間にかクラス代表を決める決闘が行われることになっていた。
何故だか俺と政宗が巻き込まれて…

「で、どのくらいのハンデをつければいいんだ？」

政宗の言葉にオルコットは驚いた様子で聞き返す。

「まあ！？早速お願いですの？」

「いいや、俺達がどのくらいハンデつけばいいかってことだ。」

その瞬間クラス中に笑いが巻き起こった。

「伊達君それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったなんてISができる前の話よ？」

「それって逆にISに頼らなきゃお前らは弱いつてことになるぜ？」

政宗の言葉にクラスが哑然とした。

「ISができてから女は強くなった。それって逆にISに頼らなきゃお前らは弱いつてことになるんじゃないか？俺と生身で戦っても勝てるんだったらISがなくても女は男より強いつてことになるけどな。誰か俺と死合おうぜ。そしたらわかるからよ。」

「そ、それはちょっと…」

政宗のその言葉を遮るように千冬教師の言葉が割って入ってきた。

「なお、伊達と真田と織斑は専用の機体を用意することになったのでしばらく時間がかかる。」

俺と政宗、一夏は専用機持ちになるそうだ。

周りから「専用機！？この時期に！？」「それって政府の支援が出るってことよね？」などの声が聞こえてきた。

そして俺はまだ見ぬ自分のISとの出会いに胸を躍らせるのだ。

政宗が厳しい顔をして明らかにISに敵意を向けているのにも気づかず……

帰り道、俺達はしばらく自宅通学となる。

理由は簡単。寮の部屋割りが決まっていなかったからだ。

急いで男子トイレを作ったり男子専用の部屋を作ったりしているのだろう。

政宗は生憎、用があるというのでいない。三成もだ。

一夏すらも教師に呼び出されている。

結論。俺は1人で帰るしかなかった。

「ハア……」

「危ない危ない！どいてどいてー！！」

俺が溜息をつくと同時に上から声が聞こえてきた。
つて、上！？

ガツンッ！！

「へブッ！」

「うぎゃー！」

かなりいい音がして俺と降って来た男は激突した。

「いっててて…いきなりゴメン！」

「い、いや、大丈夫だ。」

男が手を差し伸べたので俺はその手をつかんで立ち上がる。

「あ、そうだ！これを竜の旦那と真田の旦那に渡しに来たんだ！」

男はそう言つとアタツシケースを取り出しそれを俺に渡した。

「この中に入ってる『モノ』を革命^{あらし}を巻き起こすために使うか選ぶのは君次第だって伝えといて。じゃ！」

男はそのまま走ってどこかへ行く。

「…何故、俺の名前を知っていたんだ？」

俺にはそれだけが疑問に思えた。

「真田君！真田君達の部屋が決まりました！」

山田教師の声が聞こえ俺が振り向くと山田教師が息を荒げていた。走ってきたのがよくわかった。

「え？しばらくは自宅通学のはずでは…」

「政府からいきなり決定が下されたんです。男子用の相部屋ができるまで女子と相部屋なんですけど…」

俺の顔が真っ赤に染まった。

「は…」

「は？何ですか真田君？」

「破廉恥でござるううううううー！！！！！！」

空に向かって大声で叫ぶと俺は一気に家に向かってもうダッシュした。

「ええ！？ちょ、真田くん！？」

山田教師、悪いが俺は…俺は…！！

「女子と共になど絶対無理でござるぞおおおおおおお！！！！」

政宗も正論を述べて即帰ってきたらしく（中学からは一緒に住んでる）俺はすぐさま家に飛び込むと自分の部屋のベッドにダイブしたのだった。

『真田！真田あ！！』

『政宗殿…』

『真田、死ぬんじゃねえ！！』

『そうだよ！旦那が死んだらこれからの武田はどうなるのさあ…！大将だってアンタが死ぬことなんか望んじやないんだよ！？』

『佐助、片倉殿、政宗殿…』

『真田！真田ああ！！』

『政宗殿、約束を果たせず申し訳のつございます…』

『わかった、わかったからもう喋んな！』

『来世で…また、お会いし…ま……』

『真、田……幸村！幸村あ！！』

「また…あの夢か…」

俺はベッドから起き上がると小学校高学年に上がったときに見てから毎日続けている夢を思い返し溜息をついた。

「そついえば、あの男…夢に出てきた佐助という男に似ている…」

まさか、な…

俺はハッとの男から預かったアタッシューケースを政宗に見せに下へ降りた。

「政宗、これをどう思う？」

「……」

政宗は考える素振りを見せるとアタッシューケースを何の戸惑いもなく開けた。

「政宗！？」

あまりにも警戒心がない政宗の行動に俺は思わず声を上げる。

「もし危険な代物だったらどうするつもり……だ……」

俺は目を見開いた。

何せ中に入っていたのは…

「IS…?」

ネックレスと指輪の形をした紅と蒼のISだったのだから…

「な、何故ISが!？」

「これは…」

政宗はその内の蒼のISに触れて不敵に笑って見せた。

巻き込まれたクラス代表決め 俺達のIS（後書き）

というわけで幸村と政宗のIS登場しました。

いつの間に巻き込まれていたんでしょうねww

感想欲しいな〜

なんて我俣言ってる暇があったらとつと次回予告ですね！

次回はセシリアとの戦闘です。

さて、政宗と幸村の武器は…

もちろん皆さん知っている『アレ』です！

セシリアVS政宗 BASARA発動！

・SIDE政宗・

この間の2つのIS、俺達専用だということがわかった。

俺と幸村の専用IS、国家から出されるのとはまったく別物だったらしいがどういう見か上はこのISを使えと言う。

まったく、お国は何を考えているのやら…

でも、これで楽しいPartyが出来そうだぜ…！

俺は一夏と自称エリートgiriの戦闘を見ていた。

ブルー・ティアーズ…早く戦りあってみてえ…！

まあ結果は時間切れで一夏の負けだったが…

「頼んだぜ蒼竜…！」
ブルー・ドラゴン

俺はすぐさまISスーツに着替えると自分で名づけたIS、蒼竜に乗り込む。

蒼を強調した装甲が俺の体を包み込んだ。

俺はそのままモニターに出た蒼竜の情報をすぐさま頭に叩き込み自称エリートgiriのISの情報も頭に叩き込んだ。

「準備は完了…。いくぜ蒼竜、思いっきり暴れるぜ！！イヤッハ
アアアアア…！！！」

テンションがむちゃくちゃ上がっている俺は背中のブースターを使

い蒼竜と共に空へと駆け上がっていった。

「す、凄いテンションだったな…」

一夏は顔を引きつらせてそう言ったがもう無視。

俺と自称エリートgirlは空中で向き合う。

「先ほどの試合を見ても逃げずに来たこと、褒めて差し上げますね。でも、私も鬼ではありませんし…最後にチャンスをあげましょう。」

「HA!いらねえよんなもん!自称エリートgirl、楽しいPartyにしようぜ!」

「(ブツッ!)そう…」

怒ってるのが丸わかりだぜ。

「なら、お別れですわね!」

お別れって…死ぬわけじゃないんだからな!

自称エリートgirl!…もう長いから金髪girlでいいか。

装備である大型のライフル銃、スターライトMK?をすぐさま展開し俺に向けて閃光を放つ。

俺はお別れの時点で空中へ高く飛んでいたので当たらなかった。

「くっ…!速い!」

「空中戦なら負けねえぜ!dragonは自由に羽ばたく!」

俺は日本刀のように細い剣を出現させ突きの構えを取った。
そのまま金髪giriに向かって急降下する。

「ハアアアア！！！」

「くっ！」

金髪giriは右に避けるが俺はその瞬間、刀を右に振るう。

『シールドエネルギー減少』

金髪giriのモニターにシールドに攻撃がHETしたことを使える
その瞬間、蒼竜が輝き始めた。

「な、何ですのこの光！？っ！」

光がやむと俺の姿は…

「「「な！？」「」」

青い陣羽織に腰にある6本の刀、違うのは青い機械の羽と兜の変わ
りにある頭に着いた水色の機械、そして足が黒い鉄の靴で覆われて
いたことだった。（↑リリカルな。はの工。オミtainaby作者）

「これは…！」

「まさか、先ほどの姿は初期設定！？」

「初期設定？答えはNOだ！これが蒼竜の本来の姿だぜ！」

こいつはやつと本来の姿に戻ったんだ。
俺にはわかる！

「金髪girl、いや、セシリア・オルコット！Come！楽しいPartyはこれからだ！！」

俺は刀を片手に3本ずつ持った。

俺の六爪流の切れ味、とくと味わえ！！

機械の羽が水色の光に包まれると俺は飛び立ち一気に金髪girlに距離を縮めた。

「ふんっ、そんな可愛らしい姿でこのセシリア・オルコットとブル・ティーズには勝てませんわ！」

「HA！んなのやってみなくちゃわからねえぜ！」

金髪girlのライフルを俺は横に飛行起動をずらして避ける。
装備が少なくなったからかさつきより体が軽い…！

自由に空を飛べるぜ！

「ヤッハアアアアア！言っただろう？dragonは自由に羽ばたくってな！」

「くっ…！ちよこまかと…！！」

ライフルの連射を俺は避けたり刀で弾いたりしている。

「まさかレーザーライフルを刀で弾くなんて…！どこまでデタラメ

なんですの！?!?」

「そう熱くなるなよ、c o o lにいいかげん?」

「お黙りなさい!」

金髪girlのISの肩から4機のビットが飛び出し空中を飛行する。

来たか、ブルー・ティアーズ!

「さあ、踊りなさい!このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの円舞曲でっ!!」

「悪いがdanceなら別のやつを誘いな!俺は生憎、そういうのには興味がないんでね!」

ブルー・ティアーズが俺の周りを取り囲み一斉にあちらこちらからビームが放たれる。

何とか避けるが1発食らってしまったらしくシールドエネルギーが減ったと伝えられる。

「チッ!しゃらくせえ!!」

俺は6本の刀に瞬時に意識を集中させる。

「Thunder・Rain!!」

4機のビットを6本の刀から放たれた無数の雷が貫き破壊する。こりゃあ、間違いねえ!こつちの世界に来てから失くなったと思ってた俺のBASARAだ!!

「しかも新技たあな！範囲も広い！これならいけるぜ！！」

俺は金髪giriに向かって一気に加速した。

「くっ…！フツ、かかりましたわね！ブルー・ティアーズは6機ありましてよ！！」

2発のミサイルが俺に向かって放たれる。

「おもしれえ…！MAGNUM STEP ver2！！」

俺はミサイルに向かって高速の突きを繰り出した。

ミサイルが穴だらけになったところを俺が真つ二つに切り裂いた。

「な！？」

爆煙を掻い潜り金髪giriの元へ。

「MAGNUM STEP！！」

6本の刀での高速の突きで相手の体制を崩し空中へと放り投げる。

「クツ！すぐに体制を…！」

「遅いぜ！！」

俺は6本の刀たちを交差しながら最大速度で体勢を立て直そうとしている金髪giriと距離を縮める。

（は、速い…！）

「JET-X！！！」

俺は金髪giriを切り裂いた。

「キャアアア！！！」

「まだまだあ！！HELL……………DRAGON！！！」

雷撃が金髪giriを襲った。

金髪giriのシールドエネルギーが大幅に削られ、勝負がついた…。

《勝者、伊達政宗！》

ブザーが鳴り響き俺の勝利を告げた。

俺は蒼竜を待機モードに戻す。

「しかし、BASARAまで使えるとはな…。どうなってんだこのIS？」

俺は蒼竜を見て目を細める。

「真田、セシリアが試合を出来なくなった。ただ、お前のISのデータを取りたいからな。こいつと戦え。」

担任の教師がモニターを指差す。
そこにいたのは…

「三成！？」

幸村の相手は三成か…

前世で戦っていた記憶がある分、三成が有利そうだが…

「頑張つて勝つて来いよ真田幸村。」

俺は紅蓮のISを纏った幸村に向かってそう呟いた。

セシリアVS政宗 BASARA発動！（後書き）

短ッ！？

次回は三成VS幸村。

そして政宗の武器はお馴染みの六爪流の6本の刀でした。

そして何故、幸村のバトルをこの回でかけなかった自分！

幸村VS三成 戻りかける記憶

・SIDE 幸村・

俺が戦うのは三成。

政宗に幼馴染だと紹介されたその日から異様に仲良くなった俺の親友だ。

俺は自分で名づけた紅蓮のIS、烈火を纏った。

「頑張つて勝つて来いよ真田幸村。」

「政宗？」

俺はふと政宗の声がしたので振り返ってみる。

まただ…

政宗は時々寂しそうな表情を見せる。

それが何なのかは俺にはわからぬが…

ISが三成の機体の情報を伝えてくる。

三成のISは狂王、接近戦を得意としたISか…

俺の烈火も同じタイプだな。

「真田幸村、烈火、出る！！」

俺は背中のブースターを起動させてアリーナへと飛び出した。

アリーナの空中に浮かんでいる白銀のIS、狂王を纏っている三成

と相対する。

「まさか、貴様と戦うことになるとは思わなかったぞ幸村。」

「俺もだ。オルコットと戦うと思っていたがまさか三成と戦うことになるとは考えもなかったでござる。」

三成のISが輝く。

これは、政宗のISが一時移行したときと同じ！？
ファーストシフト

「いくぞ、真田幸村あー!!」

三成の姿は紫を強調した羽織陣に下には鎧、足には政宗と同じように鉄の靴。背には鉄の翼。

腰には鞘に収められた1振りの日本刀という姿だった。

三成はすぐに俺との距離を縮める。

「断罪!!」

居合と同時に身を翻し俺に攻撃が当てられる。

「ぐっ…!」

俺はとっさに右腕の部分を使ってガードする。
しかし一撃が重かった。

その場所から弾き飛ばされるがすぐにブースターを使って地面ギリギリでとどまる。

あの攻撃1つ1つが重い。ISを使ってもあれはガードしきれない！
現に俺はこうやって地面まで飛ばされた…

『シールドエネルギー減少』

武器は…！あの一撃を止められる武器は…！

「遅いぞ…！」

三成が切りかかってくる。

俺はとっさに空中に飛び攻撃を回避した。

「避けたか…」

モニターに装備されている武器のデータが現れる。

「これは…！炎二槍えんにそう！？装備は槍が2本…。しかし、俺にはちょうど良いでござるな！」

はて？何故丁度良いなどと思ったのだろうか…

まあいい…！

俺の手に2本の紅の槍が現れる。

その瞬間俺のISが輝きだした。

「こ、これは…！？」

上半身はライダースーツ、下は具足（ただし靴は鉄）、背には鉄の翼という装備になった。

「某の中の何かが滾る…！燃え滾る…！うおおおおお…！！！」

俺は炎二槍を物凄い高速で突き出す。

「烈火あああああ！！！」

「くっ！！！」

『シールドエネルギー減少』

「秀吉様、こいつを斬滅する許可を！ハアア！！！」

三成が俺の後ろに回りこみ刀を振り下ろす。

「くっ！！！」

俺は炎二槍を交差させてそれを受け止める。
そして互いに後ろに飛びのき距離をとった。

・SIDE政宗・

「某の中の何かが滾る…！燃え滾る…！うおおおおお！！！」

それは間違いなく幸村が『天覇絶槍 真田幸村』に戻った一瞬だった。

それからはお互い激しい攻防が続き…

「巡れ火之魂、螺旋の如く！命尽きし後にまで！」

「死色の羽翼よ、私を抉れ！私の罪を憎む…！」

幸村の赤と三成の紫のBASARAがぶつかりお互いのシールドエネルギーが全て失くなり試合は終了だった。

「でも凄かったな3人のIS！俺の白式や普通のとはだいぶ違ってたよな？」

学園の食堂。

俺はハンバーガー定食、幸村はカレー定食（甘口カレー）、三成は和食定食、一夏はラーメン定食を頼んで同じ席を囲んでいた。

「まあな、俺も何だかあのISを纏ったとき体が軽くなった感じがしたんだ。」

「某、自分や政宗、三成の一次移項が最初は一夏の一次移項とは違ファーストシフトったので驚いたでござる。」
ファーストシフト

「あれ？幸村の一人称変わってないか？」

「何故だかこちらのほうが楽なのでござる。」

幸村は一夏にそう返すとカレーを口にほうばった。

（幸村の前世の記憶が戻りかけている…？もしかしたらISに関する
ことで戻っていくのか？いや、ISのあの一次移項ファーストシフトの姿や装備に触
れたことで…？そもそも私達のISが何故あのような型をしていた
のかも気になる…。）

「三成？」

考え込んでる三成を心配するように一夏が話しかける。

「何だ？」

「いや、何か考え込んでたから心配になってさ。」

「問題ない。気にするな。それより政宗、幸村。」

「どうした？」

「む？」

「お前達にISを渡したのは迷彩のバンダナを着けた若い男じゃな
かったか？」

俺は幸村から蒼竜を渡された。

幸村にISを渡した奴はdoes not knowだぜ。

蒼竜を手にし渡した奴からの伝言を聞いたとき、俺は女尊男卑のこの世界を変えられる力と考えた。

だが、よく考えたらこの正体不明のIS…謎だらけで使うのは些か危険だ。

少なくともこのISを俺達に作って渡した人間が信用できるかな…まあ、このISはBASARAが使えるんだ。俺達が前世で会ってる人間の可能性は高い。

「俺は幸村が預かったのを渡されただけだからdoes not knowだが…？」

「たしかに迷彩のバンダナを着けた若い男だったでござる。それと…」

幸村が考え込む。

「あの男…どこかで出会ったことがあるような、それもまるでいつも支えてくれていた大切な友人のような感じがしたのでござる…」

迷彩に幸村の友人…十中八九武田の忍びだな。

問題はあいつに前世の記憶があるかってことだ。

ただ配達頼まれただけでも知れねえし…

それに俺が知りたいのは製作者だ。製作者。

それにしても幸村、前世の記憶が戻ってきたのか？

それなら、またBattleしてえな…

幸村VS三成 戻りかける記憶（後書き）

作者の力量じゃ戦闘描写が上手いかああん！！

すみませんしたああああ！！

さて、次回は代表パーティーと転校生の話です！オリジナル展開で
新任教師も来ます！

新任教師と転入生 政宗の傷と思い出

・SIDE三人称・

「ふふっ、ここが天下のIS学園ねえ…」

1人の黒い女性用のスーツを着た黒髪の女性がIS学園の前に立って妖美に笑った。

「さて、独眼竜に虎若子、そして凶王。独眼竜と凶王は記憶があるようだけど、虎若子はどうかしら…?」

そう呟くと女性はゆっくりと学園の中に入ってしまった。

・SIDE政宗・

「「「織斑君（一夏）の代表就任おめでとーう（でいぢるー）!!」」」
「」」

結局代表は金髪girlが辞退し一夏が就任した。

それを祝ってクラスで夕食のとき一夏の祝代表就任Partyをやることとなった。

「一夏、おめでとつでござるー!」

「戦は経験を積んでおいたほうが有利だからな。頑張れ。」

「サンキュー2人とも!」

「Congratulations一夏。」

「政宗もありがとうな!」

まったく、織斑女教師も強引だな。

人の意見を無視して自分がJusticeだと思っている。

「嫌なもんだぜ…」

「どうしたの伊達君?」

「何でもねえよ。」

「そつか、じゃあこれ食べない?美味しいよ?」

俺の自己紹介を聞いてなかったのかこいつは…!

「俺はなあ、女が大っ嫌いなんだ。だから必要以上に話しかけないでくれ。you see?」

「は、はい…」

「まったく…」

「少し言いすぎなのではないか？」

俺に話しかけてきた奴が去った後、幸村がやって来て言う。

「幼き頃の出来事以外でもお前は女子を嫌っている分陰気があるぞ。」

「……少しほつといてくれよ。」

俺はやつと寮に用意された男用の部屋のベッドに横たわりながら考えた。

隣には幸村が寝ている。三成は一夏と同室だ。

まあ、それにしても…

『幼き頃の出来事以外でもお前は女子を嫌っている分陰気があるぞ。』

幸村の言葉を思い出す。

心の傷つてのは、転生しても癒えないもんなんだな…

『化け物!!』

前世で俺は実の母にそう言われた。毒を盛られたこともあった。
天然痘…あの流行病のせいで俺は右目を失いそして、母上の愛情を失った。

この世界での俺の母上は違う人間のはずなのに…！この世界での俺は奥州筆頭じゃない1人の伊達政宗という人間なのに…！

「何故、俺はまた右目を失った？何故、俺はまだ母上に嫌われたことを…殺されかけたことをトラウマとして持っている？」

右目が痛い…

右目から出るはずのない涙が出ているような感覚がする…

「助けてくれ、小十郎……」

この世界にいたのだったら、またお前と出会いたい…

またお前に傍にいてほしい…

俺の大切な Partner…

「会いたいぜ、お前に…」

なあ、神様。もしアンタが本当にいるんだったら俺の願いを聞いてくれ。

…俺の右目に出会いたい…

翌日

「くああゝ」

「政宗、眠そうだな？」

「夏か…」

「ちょっと寝不足なだけだ。健康的にはNo problem.」

「そうか、授業中寝るなよ？千冬姉の出席簿が飛んでくるからな。」

「ああ。幸村にHRが始まるまでに起こしといってくれて言ってくれ。」

俺はそう返すとHRが始まるまでSleepをとることにした。

・SIDE 幸村・

「ちょっといいかしら？」

「む？」

振り返ると長い黒髪を結った女性がいた。

「職員室はどこか聞きたいの。この学園広いから。」

「それならそこを右に曲がってその次の角を左に曲がれば職員室でござる。」

「ありがとう。じゃあ、またね（・・・）。」

女性は去っていく。

あの女性…何処かで出会った気が…

・SIDE黒髪の女性・

「連絡しなきゃね。虎若子は前世のことを忘れているって。」

さて、虎若子がどれほど前世のことを忘れてるか少し揺さぶりをかけようかしら。

面白くなってきたわね。ここには彼らの他にどれほど劣化品（IS）で私達の向上品（IBS）に対抗できる人間がいるかしら？

「まあ、織斑千冬は警戒しておきましょう。」

いくら彼女の親友とは言っても彼女が危険分子だということは変わらない。

「彼女ならばIBSと完全にシンクロした独眼竜と互角に戦えるでしょうね。」

でも、『今の』独眼竜が私達の知ってる『戦国の』独眼竜より強くなっていたらわからないわね。

・SIDE政宗・

「…ね！…だ…ま…伊達政宗！！！」

大声と殺気とともに出席簿が俺の頭に飛んでくる。
俺は出席簿を片手で受け止め殺気を飛ばした人物を一瞬で背負い投げで投げ飛ばし護身用に持っていたサバイバルナイフを喉元に突きつけた。

「っ！」

「あ、な…織斑女教師…」

殺気が飛ばされたもんだからついやってしまった。
俺はすぐに元のように席につく。

「ほ、HR中に眠るな。わかったな。」

「OK。」

ヤベツ、俺HR中なのに寝てたのか…
俺は隣の席の幸村に話しかける。

「幸村、起こせて言っただろう？（ヒソヒソ）」

「何度も起こしたでござる！（ヒソヒソ）」

前世に比べればずいぶんと声を小さくすることができるようになったなこいつ…
前世では……

『このことは秘密でいじめるよ? (ヒソヒソ)』

『それで何だ? (ヒソヒソ)』

『佐助が団子をお預けにしたのでござる。政務を終えるまで没収と言って (ヒソヒソ)』

『Ah (ヒソヒソ)』

『佐助あんまりでござる! 臍負でござるー!』

『おい! 猿に聞かれちゃマズいんじゃないのか!? (ヒソヒソ)』

『ハッ!』

『旦那? 誰があんまりだつて? 誰が臍負だつて?』

『さ、佐助エ!?』

『政務ほつたらかしにして何処に行ったかと思いきや竜の旦那が泊まってる部屋まで行ってさらには俺様の悪口かあ...』

『さ、佐助、そ、それは...』

『これから1月団子抜きね』

『嫌でいじめるううううううう!...!』

『我儕言わないの！ほら、さつさと自分の部屋に戻って政務やる！
終わるまで部屋から出ないこと！』

『ううう…（泣）』

『Ahゝまあ頑張れ（汗）』

てなことになってたからなあ…
俺は内心苦笑いする。

「今日はこのクラスに新任教師が来る。」

新任教師？山田女教師はどうした？
俺はそう思いながら前を見て……

啞然とした。

「おだのうひめ織田濃姫よ。よろしくね。」

あいつは…魔王のおっさんの正室でありそしてかつて敵対した濃姫
…！？

俺は啞然とするあまりそいつが俺を見て不適な笑みを浮かべたこと

に気づかなかった。

・三成SIDE・

政宗のやつ、ろくに寝てもいないような目をしていたぞ。大丈夫なのか？

おもに睡眠をとっているあいつを邪魔した人間が六爪流（6つのサバイバルナイフ）の餌食にならないかがだが…

「というわけでこのクラスに転校生が来ます。入ってきて。」

教室の扉が開き入って来たのはツインテールの女だった。

「ファンゼンイン鳳鈴音よ。さっそくだけどこのクラスの代表は？」

「え？石田君だけど…」

私を指差し言う1人の女。

「そう。じゃあ単刀直入に言うわ、私に代表を譲って！」

「うるさい。」

俺はハッキリとその頼みを一刀両断した。

「ハア！？」

「何故転入してきて間もない実力もわからん奴にクラスの大切な代表を譲る？失せる。」

「じゃ、じゃあ皆に聞いてみましょう！」

「いや、私達三成君のレベルの高さ知ってるし……」

「あれ代表候補以上だったと思うくらい凄かったし……」

「本物の戦場を翔る戦士って感じだったわよね。」

こちらでも一刀両断。

「じゃ、じゃあ勝負よ！私が勝ったら代表を譲りなさい！時間は3日後！第3アリーナでね！」

「こちらの都合も聞かずに時間と場所を決めるな。私は秀吉様と半兵衛様以外誰にも従わない。」

「じゃあ何時ならいいの！？」

「1週間後。」

「じゃあ1週間後、第3アリーナで勝負よ!」

また勝手に決めている。だがいいだろう。

「なら俺が勝つたら…」

「何でも言うこと聞いてあげるわよ!」

「ISに関する本を本屋、学園から『全種類』買い取って俺に渡してもらおう。」

「負けたときのリスクが高すぎない!？」

ギヤーギヤー騒ぐな。

俺は再び読み進めていた参考書に視線を戻した。

俺自身の『ISモドキ』の『正体』を知るために…

新任教師と転入生 政宗の傷と思い出（後書き）

一気に3話詰め込みすぎたせいか凄いことに…

三成のクラスは2組でしたー！

次回は鈴音と三成のバトルです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0609x/>

IBS - インフィニット・バサロス

2011年12月3日16時50分発行